

民俗建築アーカイブ⑰

## 広島県比婆郡北部の古民家（その1 堀江家住宅）

民俗建築アーカイブ担当

### Traditional folk houses in the north HIBA district, Hiroshima prefecture: Part 1, the Horieke House. Editorial Committee

本学会前会長の佐藤重夫先生（以下敬称略）は戦後間もない頃から、広島や岡山の僻地を民家・社寺の探求に歩き回って、歴史的に価値ある建物を発掘した。それらの多くは後に重要文化財の指定につながっている。今でこそ、自動車はあり、道路は整備され、奥地にも気軽に行き調べるが、佐藤が建築の調査を始めたのは、通信省を退職して郷里岡山に帰った昭和21年からのことであるから、状況が全く違う。当時、佐藤は折り畳み自転車を手に入れ、リュックサックと自転車を背負って汽車やバスで行けるところまで行き、後は自連者や徒歩で探索したとご息女から聞いたことがある。当時の苦労は想像できない程である。初めは岡山県内を対象にしていたが、昭和25年に広島大学建築学科に赴任してからは広島県も調査対象に加わった。当時は国を挙げて戦後の復興に躍起となっていた頃であり、人々は生活もおぼつかない状況のとき、古い建築物の保存に目を向ける余裕などない時代であった。半壊しただけの古い民家が惜しげもなく取り壊されて、新生活運動の名のもとに地域の実生活に合わない住宅に変わってゆく風潮のとき、少数ではあるが日本本来の住宅に目を向け、努力した人がいたことは記録しておかなければならない。当時のそんな微力な活動に対して、遅ればせながら各県の教育委員会が民家の緊急調査を呼び掛けたのは昭和30年代中頃のことである。全国の民家の実態を組織的に調査する始まりであった。佐藤はそれより10年以上も前から一人で岡山、広島県の県内を廻り、価値ある建造物を渉猟し続けたのである。本学会誌『民俗建築』144, 145号に、そのころ（昭和27年～29年）調査して重文に指定されている岡山県北部富村の森江家住宅を紹介したが、本稿では広島県北端の山間集落にある2軒の重文指定民家を取り上げた。

昭和29年、佐藤は広島県北端の比婆郡（図1）を調査した。庄原市から北上する国道314号線は比和を通り、森脇、高野（新市）を通って王貫峠を越え島根県に入る。古代から開かれた往還であるが、中世には尼子氏と毛利氏の対立の中で政治的・軍事的重要な道となっていた。佐藤はそこで2軒の民家を発見した。比婆郡高野町（現：広島県庄原市高野町）にある堀江家住宅と比婆郡比和町大字森脇の荒木家住宅である。形や材や造りを見て、きわめて古い時代の民家と知り、改めて実測調査をしてその結果を昭和30年秋の日本建築学会中国支部研究報告34号に発表した。その時の発表論文を探したのだが、当時は研究報告を印刷して保管する体制が整っておらず、学会発

行の印刷物は発見できなかった。しかし佐藤家にその論文の草稿が残っており、更に論文に載せなかった写真や資料も沢山発見できたのは幸いであった。今では失われた貴重な資料が多い。以下に、佐藤の発表した論文を紹介し、更に未発表の写真や図面を紹介して解説するものである。本稿では（その1 堀江家）と（その2 荒木家）に分けて扱うことにした。なお、文中のカッコ内は筆者が加筆したものである。

【日本建築学会中国支部研究報告 34 号】

広島県比婆郡北部の古民家

広島大学助教授 佐藤重夫

広島県比婆郡高野及び比和地方は備後及び安芸より出雲に通じた古い山道の貫いた広島県北端の山間部落で、王貫峠を越して、島根県三成町に行く山間の宿場新市がある。この近在に山城である葦城があって、室町末まで尼子氏が寄っていたが後毛利元就に亡ぼされ、一部の武士は土着していった。こういった土地柄の此処に非常に古い農家があるので、その二例を紹介し、江戸初期、或いはそれ以前の農家とその生活の姿を探る資料にしたいと思う。

(1) 堀江家（高野町下高野山、中門田）

現在の平面図（図3）を見ると、一見畳敷の室三室（おもて、みせ、なんど）と勝手と称する莫藪敷板の間の広い座と（にわ）と呼ぶ土間があり、それに馬屋が右手に付いた一般農家の形と大差ないものようである。然し写真7に見えるように「みせ」及び勝手南側の間仕切り等は極く最近に作られたもので、構造上元来のものでないことはよく解ると共に、納戸なども畳から出発した寸法はなく、納戸と「おもて」との間の床の間や仏壇等も少し以前の雑作であることは充分よく解るものである。それに太い柱は極度に湾曲した栗材をそのまま用いており、納戸と勝手の境など元々建具はあったものと考えられない程のものである（註参照）。太い10本の柱は構造上元来のものであることがこの家の第一の特徴である。「おもて」の間廻りの柱は相当に古くはあるが室として建具を用いるように古い時代に一応作りかえられたらしく、柄穴等不必要の処に残っており、その後に亦押入床等が設けられた二段の改変がうかがえる。

構造方法は全体を水平に造るというような事はなく、大玉石を柱下の基礎にすえ、その上に一本一本の柱を而も自然の姿の曲材のままで建て上げ、ひきもの（桁）をもって繋ぐという至って原始的な方法で架構を作り、全て手斧仕上げである。柱間隔等が全て自由で、凡そ一間二間という程度であるのだろうが、正確さは全くない。従って、建具や畳という規格を用いる考え方以前の古いものであることがうなづけられる。この堀江家は天正18年（1590）初代與市が死亡し、それ以来現在迄370年に涉って連続した家系で、特に養子を迎えたことのない事を誉れとしている家である。その間、家庭は非常に豪商ということではなくてもかなりの土地を農耕し、また小作せしめて

経済は安定した親方であり、350年回忌、300年回忌というものを今迄数多く行っている点から見ても珍しく古い家柄と云えよう。また明暦2年(1656)の切畑帳を保存しており、それに「やこうじ與左衛門」の名が数多く見られる。與左衛門は與市三代の孫に当たるが元和7年(1621)6月14日に死んでいて、明暦3(1657)年には與市4代の孫の與兵衛が死んでいる。然し切畑帳は先代の名義のままにされていたのであろう。「やこうじ」というのは、この家のある小字名称で、葉王寺という寺跡があったところからの名称で、この寺跡に今も小堂が建てかえられて建っている。堀江家南方100米の位置に当たっている。この家の裏山80米の地点に祖先の墓地があり、その内の二つは直径5米程の円墳である。この円墳上には何れも白大理石の宝篋印塔をのせており、小形のものではあるが、その形は明らかに桃山時代前後のものと考えられる。

家屋の大きさの他、以上の各種の点から考察して、この家屋は堀江家の盛んであった桃山時代前後に出来た家であろうと考えるのが妥当ではないだろうか。そうして何回か手が加えられているとは言え、当時の農家である豪家の生活様式と建築様式を最もよく現代に残している家の一つと云えよう。即ち、広い板敷と大きな土間(にわ)という原形で、その板の座の一方には寝所が入こみの如く作られ、「にわ」の一方には家畜の室が作られるに過ぎないという形を非常によく残している。而もその内部の家族は相当に多人数であったであろうことも考えられる。それは親方として下男下女を持つと共に、子供も多く、これは相当に一代が長い点からも察せられた。

(註) 柱が太く甚だしく湾曲しているので、現在は建具を用いるために大きな方立板をはめて用いているが、これは不自然であり、以前は箆を下げるとか、何か適当な方法で仕切られたものかも解らない。或いはそんな仕切りはむしろ無かったかも解らない。

(堀江家はこの発表が契機となり、昭和41年12月5日に国の重要文化財に指定された。

旧所在地：広島県比婆郡高野町大字中門田字城山下257番地

現所在地：広島県庄原市高野町中門田)

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んでください。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ担当 古川修文

[syu-bun@jcom.home.ne.jp](mailto:syu-bun@jcom.home.ne.jp)